



セカンドステージ指導

運動会の取組をされながら、8月5日の研修で覚えてくださった技術を使っていただいております。ここで、ちょっと原点を振り返ってみます。

1st ステージ指導：

全ての子供対象に通常の学級で行います。どの子にもわかりやすい指導（いわゆるユニバーサルデザイン的な指導）をめざして行われます。「ねっこ」は○。○と表したり、「○」はパンと手をたたき、「。」はグーにするってやつでした。

三角を書いて「きゃ」の指導もそうでした。声を出しながら目で見て・・・。

き や
き や
き や
き や
きや
きゃ

こんな紙面の使い方で行（紙面）を稼ぎよったな。しかし、文字は二つのままなのに、音節が1つになるというのは不思議なものでござる。「や」を小さく「ゃ」と標記するところに工夫が見られるでござる。



English デハ'can'ノ ca ノ部分ガソノヨウナ発音ニナリマスネ。シカシ、car ノ ca ノ部分ハ違ウ発音。コレ難シイ。

2nd ステージ指導：

「どの子にもわかりやすい」と銘打ったはずがそれでも理解の遅い、あるいは理解の出来にくい子供がいます。授業をされていたら担任の先生方は把握されていることと思いますが、MIM-PMテストではっきりと配慮を要する子供が明らかになってきます。この段階での配慮が2nd ステージ指導でした。MIMのガイドブック p.59 には

通常の授業において、特殊音節に関する効果的な指導を行っても尚、習得が不十分な子供がいます。その子供たちに対しては、ルールの再確認等を通して、着実に特殊音節の習得を叶えていく必要があります。このように、2nd ステージ指導は、通常の学級の中で、補足的な指導として実施されます。

（略） 態勢的には一斉指導のようであっても、2nd ステージ指導対象の子供へ、重点的に配慮を行ったり、誰でも参加できるような形態にしたりすることで、設定しやすいようにすることが考えられます。

とあります。指名の順を考慮したり、モデルとなる子供に先ずやらせてみてから課題に取り組ませたり、杉本先生から教えていただきました。



確か、一枚の印刷物であっても、早くできてしまう子には、自作の問題作りができるようにしておくことも有効な手立てでござったのう。余のことを再評価する映画『柘榴坂の仇討ち』は愚直に生きる者が報われるという内容でござる。是非ともご覧ください。



交流会 沖縄の発表に学ぶ

「平成26年度発達障害の可能性のある児童生徒に対する早期支援研究事業協議会」が文科省で行われ、参加してきました。彦根では先生方に取り組んでいただいているMIMの事業です。「発達障害のある子供へのアドバイザーを雇用して巡回している」とか「就学時健診から臨床心理士を導入し、対象者には教育相談につなぐ」など、この事業を利用したいいくつかの取り組みを聞かせていただきました。各地いろいろなアイデアを出して発達障害が疑われる児童生徒の早期発見、早期対応に取り組んでおられました。

文部科学省から皇居に向かうと桜田門があり、そこからお堀に沿って西へ300mほど行けば井伊家のお屋敷でござる。政ごとの中心でござった。



その中で、彦根、大阪府狭山市、福岡県飯塚市の3市がMIM関連の取組です。文科省の調査官もお勧めで、他の参加者に宣伝をされていました。もう解禁でしょうから触れますが、実は今回の教科書検定では海津先生監修の国語教科書が登場し、1年生(上)の特殊音節を学ぶところでは動作化・視覚化を取り入れたものが登場するくらいに認知されだしています。



教科書採択にかかるお話しはデリケートなので、これくらいにして、標題の件に移ります。他地域の取り組みは、大がかりな仕組みを作って取り組んでいますから、それをまねるのは難しいですが、沖縄の発表は直ぐにも取り入れられますから、ご紹介します。

- 1 先生が発問したとき 「はい」「はい」と児童が手を上げて、担任の先生が「〇〇さん。」と指名し、指名された子供が発表します。ここで、沖縄名護市では、先生が発問したら直ぐに、発表したい内容を「となりの人に話してみよう。」と声をかけるそうです。もちろん、授業の進め方や、評価の関係から、この方法ばかりというわけにはいかないと思います。しかし、多くの子どもたちが誰かに自分の考えを聞いてもらうチャンスが与えられます。学級全体では発表者の数は限られ、自分の意見を言えない子供が一旦隣に伝えることで、発表そのものにもなり、リハーサルにもなる。良い方法だと思います。
- 2 沖縄名護市の取組が、中学年の算数のみに焦点を当てて研究されています。この事業は発達障害が疑われる子供をいち早く発見し、対応するというものでした。彦根は小1の特殊音節というピンポイントの指導からそれを行います。沖縄の方法も同じことが言えます。中学年の算数を選ばれたのは、おそらく抽象思考に移行する4年生から5年生の発達段階を意識されたものだと私は思いながら聞いていました。小数の計算については、「小数点を揃えるのだったのかな」、「右端を揃えるのだったかな」というのは、解答を導くための技術ではなく、加減法と乗法の意味を知らないと、子どもたちは直ぐに忘れてしまいます。時間の関係で詳細は触れられませんが、そのあたりを名護市は取り組んでおられるのでしょうか。たったこれだけのことで、発達障害を疑ってみる材料にはなると思います。



なるほど、小数点を揃えるかどうかの部分だけでも、知的な課題なのか、不注意なのか、視覚認知の課題かなどが想定でき、引っかけた子どもを丁寧に
見ることで、早期対応が可能になるというわけでござるか。小1で発見できなかった子ども達を3年、4年で改めて見つけることができるのでござるな。

しかし、ペリーは顔だけだして、何をしておるのじゃ。



中学校でのこと



Naosuke is the 13th load.
He likes 'Cha·ka·pon'.
He was born in Hikone.
He studies English with me.
動詞ニハs ガツイテマスネ。

先日中学校の校内研究会に参加してきました。英語の授業で、例の「三単現のs」の導入でした。日本語には無い文法ですからややこしいお話です。

授業はパワ

こら！殿と呼べ。



ーポイントで絵が動きながら、しかも身近な学年の先生を話題にし、さらにカード、板書、先生のジェスチャーを交え、あの手この手で「三単現のs」がシャワーのように注ぎ込まれていきます。その後、この文法を習得するために言ったり、書いたり練習が入り、まとめという流れでした。

私はこのクラスを見るのが初めてですから、誰がどこでつまづくのかはよくわかりません。全体を見ていると、全くわかっていない子や集中を切らせている子は何となくわかりますが、細かなところはわかりません。当然教科担任の先生はそのあたりは踏まえて授業を進めておられますから、見ていてリズムカルにスムーズに、そして楽しく授業が進んでいきました。

MIMの考え方で授業を振り返ってみますと、導入から生徒達が文法事項を習得するまでの部分は、実に多彩な方法で指導されていましたから、1st ステージの指導として工夫されたものであったと思います。あのややこしい「三単現のs」を多くの生徒が理解をしていたと思います。

次に発表させる部分で、先ずよくわかった生徒が発表をする。ちょっと自信のない生徒は、ここが確認のチャンスです。いくつか教師と友達のやりとりを聞いているうちに、理解が深まり、目の前のプリントの課題に○が増えてきます。自信がつけば発表してみようという気分にもなります。ここで決して自信なさそうな生徒、わかっていない生徒を指名しないことが大切です。これが2nd ステージの考え方です。何人か指名している内に、わかった顔になった時点で、2nd の生徒に発表を求め（プリントをさせていたら、正解であることを確認しておくといよい）発表できたら次への自信になります。たぶんこの授業では担任の先生がこのあたりをうまくコントロールされていたと思われるから、こんな工夫があったことは想像できます。

さてこの時間に全く理解できない生徒には呪文のように「He, She, It, 名前の時はs」と唱えるといいよと。確かに。これが3rd ステージ指導になるのかな。3人称の考えを理解するのは難しいけれど、とりあえず、「He, She, It, 名前」の時はsをつけると覚えれば、今は正しい答えが導き出せます。これで自信をつけて、次のステップへ進んでくれることを願っています。

つまづくところは何処か。それは誰か。これをはっきりさせて、
1.指導の工夫 (1st ステージ) 2.授業中の配慮 (2nd ステージ) 3.個別の支援 (3rd ステージ) の3段階で進めるということが、基本でござる。
ところで、ペリーが言う「ちゃ・か・ぼん」のことじゃが、余が嗜むお茶、和歌、能のことでござる。短くまとめたものよのう。「He, She, It, 名前」もじゃが。





市中の子どもたちの様子を見てきたぞ。よくがんばってやった。安心したでござる。



殿、暴れん坊將軍みたいなことをされては困りまする。

先日、ある小学校の1年生、特殊音

節の授業を見せていただきました。改めて不思議に思ったのが、長音のところ。

「おばあさん」:「ば」を伸ばすと「あ」の音が聞こえるから「あ」と書きましょう。

「おじいさん」:「じ」を伸ばすと「い」の音が聞こえるから「い」と書きましょう。

なるほど。

「さんすう」:「す」を伸ばすと「う」の音が聞こえるから「う」と書きましょう。

「とけい」:「け」を伸ばすと「え」の音が聞こえるけど、「い」と書きます。

え!!、何でや。

(「おねえさん」だけ例外)

「おとうさん」:「と」を伸ばすと「お」と聞こえるけど「う」と書きます。

あれ?ほんまや、不思議。

(「おおかみ」バージョンのみ例外)

「おおかみ」バージョンって?というあなた、ガイドブックの p.27 の下をご覧ください。「何でだろう」と私の年になると考えてしまいますが、子どもたちは、「そういうもんだ」とばかりに覚えてしまいます。「おとおさん」とPCに打ち込んで変換させたら「音お産」となりますから、今までから意識せず「おとうさん」と打ち込んでいたんだなど、改めて私が小学校1年生の時に担任してもらった泉本悦子先生に感謝です。

子どもたちは一通り、声で練習をして、書く作業に。ちゃんと先生は「作業三原則」を守って、説明の後、子どもたちに確認をして、作業中はひたすら配慮のいる子どもを見て回っておられました。これが2nd ステージ指導なんですね。プリントの裏にも問題と、自作の欄がありましたから、暇そうにする子どもはいませんでした。

最後にMIM-PMテストをされました。11月になって、まだのんびりと取り組んでいる子どもが多いのです。今日の授業のことを理解しているはずの子どもも、一つ一つ確かめるように取り組んでいました。結果として正答数が少なくなり、セカンド、サードの子どもたちばかりの評価になってしまうのだと思います。(各学校で、その辺の見取りをお願いします。)

「読み」は「拾い読み」から**ある程度まとまりのある単語や句として読める**ようになると圧倒的に早く読めるようになります。ある程度のまとまりとして読めるかどうか「読み」を楽にできるかどうかのポイントです。「読むこと」を苦しめない子どもたちに、1回わずかの時間で結構ですから、PMテストや早口言葉、そして杉本先生に教えてもらったゲームなどさせてみていただけませんか。



モウスグ サンクスギビング デス。ターキーヲ食ベテ。コレガ終ワルト、サンタクロスノ季節デスネ。ドウゾ皆サンメリー クルシミマス!!



ペリー、何を言っておるのじゃ。



誰がつまづくのか、どこでつまづくのか

「授業改善」という言葉をいろんなところで聞きます。よくよく思い出してみると、「このごろの若いのは、・・・」と同じくらい、ずいぶん前から言われているような気がします。それも繰り返し、繰り返し。ということは「改善」されていないのだろうか、それとも「改善」したと思ったことが、検証した結果「改善」に至っていないのか、皆さん、どう思われますか。

MIM-PMテストを見ていて、思ったことがあります。あれは、「読み」に関してどれくらいできるようになったかが、すぐにわかるわけですが、2段目、3段目・・・と取組めるようになると、右の列から清音、濁音、長音・・・という並びで、どの音につまつきがあるのかがわかるようになっていきます。

つまり、どの子がどこでつまづいているのかを知ることが、すごく大切であると、MIMは教えてくれているような気がします。「どこでつまづくのか」がわかると、指導に工夫をしましょうし、「誰がつまづくのか」がわかると、その子への支援を考えます。この2点が授業改善の両輪となるように思います。

ここからは、6年生の先生へ。全国学力・学習状況調査の学級の結果が文部科学省から各校に送られています。これを一工夫すると、この両輪が見えてきますので紹介します。

正答数	1		2		3		4		5		6		7		8	
	正誤	無	正誤	無	正誤	無	正誤	無	正誤	無	正誤	無	正誤	無	正誤	無
15	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1
8	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1
12	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1
14	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1
10	○	9	○	1	○	9	○	1	○	9	○	1	○	9	○	1
12	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1
11	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1
12	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1
14	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1
14	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1
15	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1
12	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1
8	○	3	○	3	○	1	○	2	○	3	○	2	○	3	○	1
8	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1
10	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1
13	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1
9	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1
2	-	0	-	0	-	0	-	0	-	0	-	0	-	0	-	0
12	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1
4	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1
4	○	2	○	3	○	9	○	1	○	2	○	2	○	3	○	9
11	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1
11	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1	○	1

この表は正答、誤答、無答が書かれた表です。これはすごく見にくいので、正答を空欄、無答を「無」そして誤答は解答分類の番号だけ残します。

するとこんな

見やすい表になりした。国語Aです。この表を見ていると故事成語は結局あてずっぽうで答えているなあとか、新聞の表現については、何故3番と答えた子がが多いのだろうか、「つ」君は漢字を含めて記述ができないなあ、けど選択問題はあきらめずに挑戦しているぞ、「せ」君は最後まで持たないなあ、というような見方ができます。**誰が、どこで**を把握すると、次の授業が変わってきます。

氏名	正答数	設問番号															
		1一	1一	1一	1二	1二	1二	2一	2二	3	4	5	6一	6二	7	8	
あい	15																
い	8			9			無			2	3	1			6	3	
うえ	12						9					1	1				
14																	
おえ	10	9						3		1						3	
か	12										1					3	
き	11							2		1	3					3	
く	12						9					1					
け	14											1					
こ	14											1					
さ	15																
し	12									1	1					3	
ず	8	3	3					2	2	3	2	3					
せ	8								1	無			7	9	無	無	
そ	10						9			2	3	1	3				
た	13									2	3						
ち	9										1			7		3	
つ	2	無	無	無			9	無		2	3	2	2	7	4	3	
て	12										2				9	3	
と	4		無	9			9			1	3	2	3	6	無	3	
な	4	2	3	9						2	1	3	2	3	5	2	
に	11						9		2	2	1						
ぬ	11						無	無				2					
		漢字読み	漢字書き				故事成語	情景	新聞	登場	並列	意味	情報を	言葉の			
		標識	街灯	勢い	血	祝う	予防	五十歩	百聞	描写を	人物の	並び	情報と	意味と			
										理解を	表現の	の並び	関係を	使い方			
										方法相	表現の	関係	を捉え				
										を用い	関係	を捉え					
										て読む	を捉え						



殿、NHKの大河ドラマで殿がいずれ処刑する吉田松陰の話が始まりましてござります。

存じて居る。あの者には惜しいことをした。人が学ぶことは如何なることかを真剣に考えておった。この国のことも、余と同様に考えていた者であった。松陰の叔父であり師である玉本文之進と明倫館でのやり取りは圧巻であったのう。



ということで、全く関係ありませんが、殿が感心した場面の一部を紹介します。

寅次郎：質問がございます。

文之進：なんじゃ。

寅：孫子の兵法に「敵を知り己を知れば百戦危うからず」とありますが、その意味は？

文：戦に於いて相手の力を、己の力を正しく知れば、決して敗れることはない

寅：山鹿素行先生は『先知』を重んじました。『先知』とは何かお教え願いたい。

文：先知、すわなち、『先に知れ』ということだ。

寅：ならば問います。この明倫館では、なぜ、敵となるかもしれん異国のことを学ばせようとししないのです。

文：この国は、皆がそれぞれの役割を果たすことで、泰平を保ってきた。目新しさに心奪われ、異国にかぶれ、皆が勝手にふるまえば、いずれこの国は終わる。野蛮な西洋人の考えに染まっていいはずがない！

寅：己の頭で考えることができるものは、かぶれも、染まりもしません。ただ覚えるだけでなく、考えること。それを教えてくれたんは叔父上です。それに、この本は邪な本ではありません。これは幕府が禁じた本。だからこうしましょう。(本を破り捨てる。)(懐からもう一冊取り出し) むだです。どこにでもあります。ここで止めても日本中にあふれます。なぜ、皆が、禁じられた本を読もうとするんか。知りたいからです。学びたいからです。変えたいからです。今までの学問ではもう日本国は守れん。本当にこん国のことを思うもんは知つとる。死に物狂いで学ばんにゃ、こん国は守れんと。

皆に問いたい。『人は、なぜ、学ぶのか？』 私はこう考えます。学ぶのは、知識を得るためでも、職を得るためでも、出世のためでもない。人にものを教えるためでも、人から尊敬されるためでもない。己のためだ。己を磨くために人は学ぶんじゃ。

「人はなぜ学ぶのか」 この言葉を聞く時、私は一人の男性を思い出します。高野雅夫さん。夜間中学を作り続けている方です。17歳まで社会からはみ出し、九州から流れ流れて東京へ、空腹で倒れていたところを拾われて、文字を学ぶ。そこから夜間中学に入り、猛烈に勉強をされました。「文字」と学ぶことを奪われた人のために夜間中学を全国に作る運動が始まりました。

識字学級で生まれた美しい言葉があります。高知の北代色さん、70歳で初めて出した手紙に「じをおぼえて、ほんとうに夕やけがうつくしいと思うようになりました。」 「学ぶ」ことの原点が文字、読み書きなのだと思えます。年末のMIM研修で、講師の杉本先生は冒頭、「一人残らず読み書きができるように・・・」と話されていました。最後の一人まで大切に読み書きを指導することは、私たちに課せられた義務というだけでなく、高野雅夫さんが同胞に寄せる思いであり、北代色さんの感性を引き出すものでもあるのでしょう。読み書きの指導は「学び」の原点なのだ改めて思えます。

新年早々、MIMとは関係のないお話しで失礼しました。書き手が吉田松陰のファンだったので。次号からは、12月26日の研修の内容を順次紹介します。2nd、3rdの指導について、杉本先生ご講演のビデオがありますから、校内で研修される時には後連絡ください。まだ編集できていないので生のままですが。



発達障害の可能性のある児童生徒等に対する支援事業報告会の報告

2月18日(水) 10時から文部科学省で、見出しの報告会がありました。2つの発表と1つのお知らせがありましたので、情報を共有します。

1 「授業のユニバーサルデザイン化」東京都日野市日野第三小学校 京極澄子先生

「ユニバーサルデザイン(以下UD)は、特別支援教育の支店ではありません。授業改善の視点なのです。」

あれ、「支店」って変換ミス。でも考えてみたら、特別支援教育の範疇に(つまり支店)と捉えておられる方が実に多いので、京極先生は先ずこのところをバッチリ押さえてからお話をされました。授業のUD化三つの要件として

- ・焦点化 目標や活動を絞り、内容理解から論理へ深まるようにする。
- ・視覚化 視覚・感覚・動作を入口にして、思考できるようにする。
- ・共有化 一人の考えを他の子供につたえ、理解や思考を深めるようにする。

可能な限り「聞く時間」を減らして活動を増やす、これを意識すればこの3点になったそうです。詳細は『通常の学級での特別支援教育のスタンダード』(東京書籍 2940円)

2 「京都教育大学の発達障害に関する専門性向上事業の取り組み」 京都教育大学 相沢雅文先生

こちらは3年の指定を受けての2年目。発達障害理解のためのDVDを作成されたという報告でした。役者さんを使い、実際に教室等で起りそうな場面をお芝居にして、発達障害を理解する研修ものと、いろんな先生が得意分野をお話するという研修など。京都府、京都市と連携して取り組まれました。

3 「発達障害教育情報センターWebサイトの紹介」 発達障害教育情報センター 梅田真理先生

発達障害のある子どもの教育の推進・充実に向けて、関わる教員、保護者を始め関係者への支援のためのサイトであるというお話でした。



これで検索していただくと、出てきます。是非ご覧ください。

さて、今回注目いただきたいのが1番の報告です。これってまさにMIMの1stステージ指導なんですね。ということで、

2月20日(金)は今年度最後のMIM研修会、東京から栗原先生にお越しいただき、1stステージ指導を中心にお話しいただきます。次年度につながります。乞うご期待。



第4回MIM研修会を終えて

MIMの研修会に多数出席いただきましてありがとうございました。今回「現役」通常の学級担任の栗原光世先生にお越しいただいて、お話をさせていただきました。同じ学級担任の立場から苦労話や工夫のあれこれを聞かせていただいて、参考になることばかりでした。私は何より、「教師は専門職である。専門職にある者は、常に研究と修養をしなければならない」と話された秋田大学の阿部先生(2月校園長会の講師)のお話を思い出しながら、栗原先生のお話を伺っていました。こうして東京から彦根に来て講師をしてくださるくらいの先生がまだ研究の手を緩めない姿勢に、私は反省しきりでした。

さて、お話の最後に、今回初めて「助詞をMIMでどう扱うか」を話題にされていました。まだ始めたばかりということでしたが、確かに表記と発音が異なるということでは「特殊音節」の仲間に入れてもいいかもしれないし、子供たちにとっては学びにくい内容なのかもしれません。

私は好奇心が旺盛なものですから、そのお話を聞きながら、本質とは別のところにヒットして、次のようなことに疑問を持ちました。

そういえば、どうして副助詞の「は」はwaと発音するのだろうか。

どうして格助詞「へ」はeと発音するのだろうか。同じく「を」はoと聞こえるのだろうか。

他の助詞に音の変化はあるのだろうか。なぜ「が」はaに聞こえないのだろうか。



コンナ時、外国語学習
が、役二立チマスネ。

たとえば、韓国語で「こんにちは」は안(アン)녕(ニョン)하(ハ)세(セ)요(ヨ)です。でも韓国の方は、アンニョンアセヨと発音される方が多いです。これは、「は」と「あ」は同じ構音(舌や唇の位置が同じ)で、息の強さ

だけが異なることからおこる現象です。ゆっくり言うとハセヨが、早く言うとアセヨになる。は行はどの音もこのようなことが起こります。これをㄱの弱化と言います。

そして、「わ」と「を」は英語ではw音。音声学的には「半母音」と言います。韓国語では母音に入れます。日本語はどれも子音。どれも子音だから全く違う音に思えてしまうのですが、実はどれも近い音なのです。しかも音が弱くなることで、「は」行が半母音や母音に、半母音は母音になるという現象が起こっているだけであることが分かります。だから、助詞の中で「は」行と半母音の音しか音声変化がないという説明ができます。助詞は付属語ですから強調されないの、こんなことが起こるようです。

韓国の方は、ハセヨであれ、アセヨであれ、どちらも正解ですから困ることはありませんが、日本語は、明らかに「は」と書いているのに「わ」と読まなければならない。弱く発音するときは半母音の「わ」に成るんですよと言っても、余計に分かりません。ここは栗原先生の研究を待つのも良しなのですが、先生方のご経験や、これからの「実験」によって効果的な指導法を解明していただけませんか。おそらく、昔のお公家さんは「まろは」はmarohaと発音していたのかも知れませんが、古い話ですが、広田三枝子さん『人形の家』では息を出し過ぎて、ア行がハ行に。「私はあなたに命を預けた」を「私わっは はなたに ひのちほ 預けた」って歌っていたような。(広田?誰)



撥音、促音、長音など特殊音節は標記上のルールで、助詞は音声学的な変化があったことが分かった。カテゴリーは違うかもしれないが、子ども達には同じように間違えやすいことには違いない。市中の子どものため、よろしく願い申す。



彦根でMIMに取り組んでみて、何かわかったことを申してみい。

殿。勉強には、一点一画を大切に作る勉強、つまり丁寧なすることと、スピードを意識することのどちらも大切だと考えられます。

「スピード」、またおぬしは西洋の言葉を使いおって。詳しく説明せい。



今年度、全ての小学校でMIMの考え方で「特殊音節」の指導に取り組んでいただきました。1年を終えるにあたり、気付いたことや、来年度に向けたことを少し書いてみようと思います。

まずは、「スピード」について。これは、この1年間で強く感じたことです。始めに、私の感想よりも、ある図書に書いてあることをそのまま紹介します。

「スピード力」を育てる学び方指導 日常生活のスピードを上げる

書道や硬筆では、とめ、はね、はらいが重要です。しかし、これだけを重視していると、文字を書くスピードが遅くなってしまいます。

文字を書くスピードというのは大切です。中学受験をする、しないなどにかかわらず、ノートをとるのが遅いと、後々困ってしまいます。よく学校では、遅い子を待ってあげることが大切、という事がありますが、そのまま高校、大学に行ったり、もしくは社会に出たりして困るのは、遅い子自身です。間違った個性重視の典型でしょう。

文字を書くスピード、日常生活のスピードをあげるというのは、大切なことです。「ゆっくり、ていねいに」ももちろん大切ですが、それと同じくらい「スピード」も意識させるように、常に先生が声かけをしていかないといけません。

『学校でできる！学力がぐんぐん伸びる学び方指導&ノート法』高濱正伸著 明治図書 p.34

昨年5月2日、海津先生に起こいただきMIMの理論と、MIM-PMテストの実施方法を学びました。その中で、MIMの目指すものとして、「読みの流暢性」について触れておられたのを思い出します。1年生の各クラスにはMIMパッケージを配付していますので、今一度ガイドブックをご覧ください。表紙をめくりますと、折り込みになっているページがあって、その見出しに

「Part 1 読みの流暢性はどのようにして育まれるのか？」とあります。つまり、この指導のゴールは**流暢に読み書きできる**ところにあるわけです。ポツポツと拾い読みができるではだめで、言葉がひとかたまりのものとして捉えられることが大切なのです。ひとかたまりのものとして捉えにくい原因を作っているのが特殊音節であるとして、視覚、聴覚、動作を通して感覚的に捉える練習をし、獲得させていきます。

MIM-PMの目的(ガイドブック p.49)にも、テスト②は3つの語が縦に続けて書いてあるもの素早く読んで、語と語の間を線で区切っていきます。(略)これは(逐字ではなく)語を視覚的にまとまりとして素早く認識する力を見るものです とあります。ハングルや英単語は分かち書きをしますが、日本語はしませんから、この力が大切です。しかも「素早く」と書かれている点がゴールである「流暢性」へと誘います。

なるほど。「スピード」というのは流暢に読み書きできる力を付けるために欠かせないというわけか。世に出たときに必要な力であるとともに、子どもの中に身に付けないと、本人が一番困るということでござるな。あい、わかった。

